

紙上身上相談にみる家族問題の変容－1920, 1990－

相模女子大短大 臼井 和恵

目的 1920（大正9）年は第一回国勢調査の実施年次である。国勢調査結果は我が国の核家族化や家族数の減少を論ずる上での基礎データである。本報告では、国勢調査のスタート年次であり、かつ重要な比較年次である1920年の家族問題を70年後の1990（平成2）年の家族問題と比較しつつ明らかにしたい。法制度（民法）改革以前における戦前の家族意識および家族問題に、夫婦関係、親子関係、嫁姑関係等に関わる＜紙上身上相談＞事例の分析を通して接近し、さらに70年後の同種の身上相談事例と比較することにより、家族問題の変容の一部を捉え得ることが出来たらと願っている。また、「家」制度と家族との関わりについても言及したい。

方法 大正3年5月3日に、読売新聞の「よみうり婦人附録」紙面に創設された「身の上相談」欄の投書事例の1920年掲載分（567事例）と、同じく読売新聞の「人生案内」欄の投書事例1990年掲載分（299事例）とを分析資料としている。

結果 1990年には、「戸主同士、跡取り同士は正式に結婚出来ないのか。従って、子供は私生子か庶子にならざるを得ないのか。法的打開策のご教示を」という身上相談が突出して多い。結婚の同意権をも有した「強い戸主権」に対する結婚当事者からの悩みもみられ、戦前の「家」制度の实在を感じさせる。主たる変容は、妻の地位の向上、親＝「家重視から自分＝個人重視、疎外される嫁から疎外される姑、等が指摘しうる。反面、夫の浮気問題等の十年一日の如き家族問題も存在する。